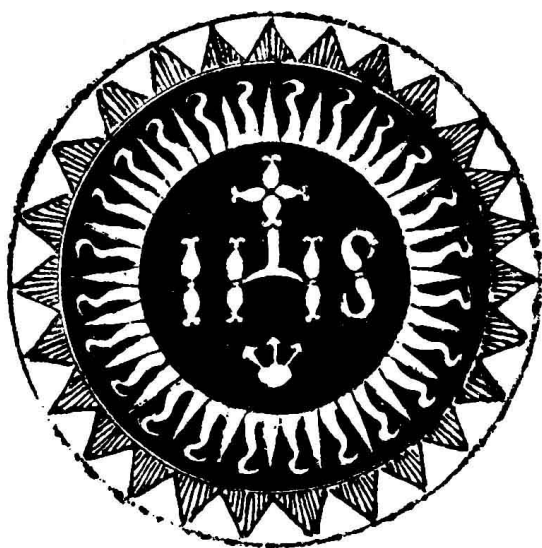


敷屋丹支切

—或る後日物語—



長與善郎

講談社

昭和三十一年十一月五日 第一刷發行 ©

切支丹屋敷

定價 二四〇圓

著者 長 與 善 郎

發行者 野 間 省 一

印刷所 圖書印刷株式會社

發行所 株式會社 大日本雄辯會講談社

東京都文京區音羽町三ノ十九
振替東京 三九三〇
電話大塚 04三三〇一(代表)

※丁本・亂丁本はおとりかえいたします。(横田製本)

切支丹屋敷

— 或る後日物語 —

裝
幀
清
宮
彬

序にかえて

私の両親はともに長崎縣大村市の産で、嘉永六年ペルリが初めて來航した前年に産れた母は、娘時代に踏繪を踏まされた思い出を私に語ったこともある。周知のとおり、大村は九州の中でも小藩ながら秀吉の昔から最もキリスト教の旺んであった藩の一つで、維新の頃まで隠れ切支丹きりしたん（信徒）の絶えなかったためであろうが、幼少から蘭學をやった父が早くから長崎へ出て勤め、明治初年には洋行してますます歐化主義になっていたりした關係で、私は子供の時からシナ風の文物とともに、所謂南蠻風の物には見慣れていた。しかし青年時代キリスト教には一時眞面目に牽かれて感ったこともあるだけに、大正の初め異國趣味エキゾチックの文藝が流行し、切支丹殉難の事蹟までが

そういう趣味的興味であつかわれることには反感を抱いた。

ところが大正十一年、初めて九州、朝鮮へ初の大旅行を試みた途次、長崎の素封家で好事家であつた故永見徳太郎君からふと聞いた實話を種に小説『青銅の基督』を書いた。日本に珍しいあゝいう殉教者たちの眞剣な態度に打たれるとともに、主人公の數奇な運命への小説的感興をそそられたのだった。

更に、それから三十年もたった昨年の春、親友のT君から、あの小説の事件以後の切支丹迫害の文獻を持って來て見せられ、日本の宗教及び文化史上に特筆されていいこれらの事蹟が、存外殆んど世間に知られていないのは、もとより然るべき事情はあつたにせよ、史家の手落ちであり、甚だ遺憾なことだから、これをもとに、一つ『青銅の基督』の續篇を書いて見ないかとすすめられた。置いて行かれた二冊程の本をあちこち讀んで見ると、T君が私に執筆をすすめた理由はよく判つた。しかし『青銅の基督』の場合は、聞いたもとの話が簡單で、それを若氣の創作意慾にまかせ、勝手にいろんな架空の人物を配劑して、小説化することは、出來榮えはともかくとして困難でなかったが、内容上たしかにその後日物語ともいえる今度の史料は、飛び飛び七十年あまりに跨り、調べれば調べるほどそれをなまじフィクションにして、どこまで本當の史實か判らな

くしてしまうのがいかにも惜しく、といって、別に一つの筋に纏まった話というのはないので、大方の讀者に面白がられるように書くことは、材料の性質上、無理である。しかし史實は史實と判るように繋ぎ合わせて、脚色化することは必ずしも不可能でなく、私としては或る別な狙いもないことはないので、『青銅の基督』のような小説とは書き方がちがうことを十分斷った上、ともかく書いてみようという氣がだんだんに醗酵した。それがいよいよ取りかかっている中に思ひの他に創作の油が乗り、最初の豫想とはちがうものになってしまった。

出來榮えの結果については見る人に任せる他はないが、ただこれも『青銅の基督』の場合と同様、私が特に「切支丹」ものやその史實に興味をもつ者でないに拘わらず、全然でないまでも殆んど偶然に、人から材料を與えられた產物であることは奇縁と思つてゐる。

ぶろろーぐ

今日の東京文京區茗荷谷町九二番地という所の某家の門前に小さな石碑があり、それに「都史跡 切支丹屋敷跡」と彫つてある。その文字の上に銅板か何か嵌めこまれてあつたのが剝ぎ取られた跡が見えるが、ふと足を停めると、その傍にもういい加減古びた立て札が立っており、それにはこう記してある。

「もと宗門奉行井上筑後守政重の下屋敷で、正保年間に獄舎を設けて禁教である切支丹の信奉者を監禁したが、享保九年焼失した後、寛政四年に廢された。今も切支丹坂の地名が遺つてゐる。」

大正七年五月指定 東京都教育委員會

説明を加えるまでもないことだが、正保年間とは徳川三代將軍家光の代、例の御前試合や、天

草、島原の亂（一揆ともいわれる）などのあったことで有名な寛永二十年間の次ぎの四年間の年號である。すなわち今から約三百年前で、その島原の亂の平定と、切支丹（きりしたん）（耶蘇教のカタリック宗徒）の徹底的とも見えた根絶、處分の手柄によって、祿高四千石の目付役から一躍一萬三千石の宗門奉行（最初の切支丹奉行）に取り立てられたのが井上筑後守である。その飛躍的榮達に見ても、彼がいかに將軍家光のお覺えめでたかったかが窺うかがわれるが、その井上筑後守なる人物の名前を、私はてんで知らなかった。それを初めて私に教えたのは、私の母の末の妹の主人（煩を避けてただ叔父と書くことにするが）松添愼一だった。

叔父はもと東北大學で史學の教授をしていた變わり者で、二三の著書があり、それらの題名から推しても、彼の本當に專攻として打ちこんでいたのは、比較宗教史とでもいうようなものだったらしく想像される。幸い、そこばくの資産があったのと、零細な恩給とで、どうやら停年の後にも食い繋いでいたが、本は賣れるわけがなく、實は私も全然讀んでいないにひとしい。しかし歴史には私もまんざら興味がないこともないので、歳の隔りの大きさと仕事の違いにも拘わらず、親類の中では唯一といえる話相手だった。殊に男女二人の子供がそれぞれ家を持ち、そのお袋であつた私の叔母に先だたれてからは、身の回りの世話をやく代わりのひとはいたものの、やはり淋しいためか、私が稀まれに顔を出すと大いに喜んで、好きな酒の相手に引きとめるのだった。

ただ彼の家が、私の住居とは同じ東京の中ながら端から端のように離れた巢鴨にあり、いくらか遠慮の氣味と、——というのは、彼は餘裕もないくせに、何ごとによらず妙に贅澤で、奢る癖があったからだ——私の無精とから、特に何か書きものに必要なことを字引き代わりに訊ねに行く位のほかは、無沙汰になり勝ちだった。しかるに——もう十數年も前のこと——或る時、駒込へ能を見に行った歸途、私はふと思ひ出し、時間が悪いと思ひながら彼の所へ立ち寄った。叔父は「珍しいな。」といって、相變わらず歡んでくれたが、その時床の間もない書棚ばかりの書齋の壁に、何か古ぼけた短冊の細軸がかかっている。何氣なく近寄って見ると、

高麗ぶねの寄らですぎ行く霞かな

という句の下に、蕪村とあるのが讀める。

「蕪村らしい洒落れた句ですね。ちょっと繪みたいだ。」

と私が評すると、

「まだ見なかったか。なに、書は本物じゃなかうと思うが、古本屋が持て來て、存外廉いんで買ったんだ。それ、どういふところを詠んだものと思うかい。君。」

という。叔父のそういう調子には、私は子供の時から慣れている。

「どういふところって、これだけの敘景でしょう。ただ蕪村は畫人だから、敘景にもどこか畫人

らしいところが出るんでしょ。」

「まあ、どうせ句だから、敘景と見ればそれだけで、後を問うことは要らぬわけだろうが、……その高麗^{こま}ぶねというのは所謂南蠻の船で、朝鮮の船のことじゃなかろうね。それが、こっちの船着き場か漁港かに、普通なら寄りそうな所を寄らずに、ずっと沖を通り過ぎてしまった。そういう敘景のつもりだろうとわしは思うのだが……」

叔父はそんなことをいった。

「なる程、蕪村の時代はまだ鎖國がきびしかったから、南蠻船は寄りたくも寄れなかったわけですね。」

「そうさ。そして、こっちの海岸の住民たちは又、それが寄らずに行ってくれたんで、まあよかったと、胸を撫でおろした。飲み水一杯でも呉れてやれば、すぐ役人にとっつかまって調べられるっていう厄介なことになるから。」

「しかし、信者たちの頑固さは又驚くべきですね。ぼくは日本人があんなに信仰に凝り固まる國民だとは思わなかった。」

私は以前切支丹關係の小説を一つ書いたことがあるので、その位のことはその當時調べて知っていた。そのことが叔父には意外だったと同時に嬉しかったと見えて、急にお饒舌りになった。

「あの時分の民間の切支丹にはこういう迷信があったんだ。自分たちはたとえ殺されても、七代目か八代目の子孫の頃には、ばてれんやいるまん（同胞とか修道僧とか譯される）を一ぱいに乗せた黒船の船團が西洋からやって来て、日本を切支丹ばかりの天國にしてくれる、っていうね。それっていうのはあのペテロやポーロが逆磔刑に遭ったりして殺されてから七、八代の後に、耶蘇教が公認されたばかりか、あんな立派なお堂がローマに建って、ローマ法王が各國の帝王以上の支配者になったっていう史傳を説き聞かされたためだろう、と思うがね。」

「丁度今の共産黨騒ぎとそっくりですね。今の左翼の連中はいくらかインテリだけに、あの當時の切支丹ほどの氣慨はともなさそうに思うけど、一方、特高課の役人たちの氣ちがいじみてる
ところも……」

私がそういったのは、叔父の一粒種の男の孫で、當時の帝大法學部の學生だった昇というのが、その少し前、「赤」と睨まれていた仲間とつき合っていただけで、大學が警察から注意をうけて調べられたことがあったからでもあった。

「まったくそっくりだ。」

叔父は一言答えて一寸座を外したが、すぐ戻ってくると、話をつづけ、

「それはまあ國の主權者ってものの氣持は、大ていいつでも現狀維持の保守的なものだというの

が一つの理由だな。殊に徳川の天下がようやく落ちついたばかりのあの當時の幕府當局が、なんでも何か凶いこと、不祥な椿事が起きると、ソレ、又切支丹だと騒いで、皆ばてれんや信者の仕業に歸しちまったのとまさにそっくりだ。せめて今の役人に井上筑後守だけの才覺と學問のあるやり手がおれアいいんだが……」

それで、その筑後守とは何者か。逆さ吊りという残酷極まる拷問の苦しさに遂に降参して、幕府の目明かし役となり、澤野忠庵という日本名を名乗ったキシントファ・フェレラというポルトガルの轉びばてれんとは時代がちがう人かと、私が訊いたことが、更に叔父の膝を乗り出させる結果となった。

「ほう、澤野忠庵を知ってるのか。」と悦ばれてやむを得ずそのわけを説明すると、それは一つ読みたいという。

「いや、叔父さんに読んで貰うようなものじゃないんです。實はそれを書いた時、叔父さんが東京にいたら話を聞きたかったんだけど、丁度その頃はまだ仙臺でしたからね。」

と私は答え、「尤もあんまり詳しい史實を知ると、却って材料負けして、初めの興が殺がれるってこともあるから、わざと年代や何かを無視して、殆んど出鱈目に書いたんです。」

そして、ただそのフェレラが萩原という主人公に鑄物の踏繪を造らせることを考え出して、そ

れが意外に神々しく出来すぎたために、萩原が飛んだ誤解をうけて、信者と一緒に殺されたことは事實らしいが、と付け足した。

「……という、それはフェレラが『顯偽録』を書いたよりおそらく大分後だな。」

流石に詳しい叔父は頭をひねって、すぐそういった。で、ケンギロクとは何かと、私が訊ねたことから思いがけない長談議になってしまったので、

「ケンとは『顯わす』、ギは『偽り』だ。」叔父は茶ブ臺の上に指で字を書いて見せ、「耶蘇教は原始未開の古代ユダヤ人の迷信から發したもので、文明な今日から見れば、まるで荒唐無稽な嘘偽りで人心を惑わす邪宗だと譏^{そし}った本なんだ。」

「そんなものを書いたんですか。」私はおどろかざるを得なかった。「フェレラ自身が、本心で……」

「まあ本心に咎めずに譏^{そし}れる範圍で書いたんだらうな。」

叔父はきざみ煙草を吹かしながら語を繼ぎ、

「いや、轉んだばてれんで、耶蘇教の神——天主^{デウス}を否定した背教の書物を書いたのは、何もフェレラが最初じゃない。しかしフェレラは果してどの程度まで読みこなしたか。ともかく『太平記』を読んだというんだから、或いはところどころ口述したのを例の有名な通詞の西吉兵衛あたりが

書き寫したもんかも知れんがね。もちろんそう書かなければ又拷問の責め苦だと脅されて、轉んだ證文に書かされたんだろうが……」

「キリストは嘘を説いたと言ったわけじゃないんですか。」

「まあ一寸讀むと、そう言っているようにも見える。キリストその人は崇拜していながら、その教えは國を滅ぼすものだと言っているような頗る微妙な書き方なんで、よほど疑い深く裏を讀まんことには、芯底の所は判らんけれども、フェレラは天文、地理や醫學などの自然科学の他に、アリストテレスの哲學や、儒教についても一應は研究した學者だったらしいから、舊約の神の天地創造とか、アダム・エバの原罪についてはもちろん、キリストの傳説の神秘化されている部分は理に合わぬ迷信だとしているのは、あながち心にもない嘘ばかりだったとも思えない。それでもぎりぎりの所の信仰は棄てずにおれるわけだからな。」

「一見耶蘇教の誹謗と見せかけて、その實宣傳になるように書くことだって出来たでしょう。」

叔父はそれに答える代わりに眼鏡をかけ、書棚を物色していたが、やがて古い日本古典集の中の一冊を見出すと、「たしかこれにあったと思うが……」と呟きながら、あちこちページを繰り、「うむ、これだ。」と言って、その『顯偽錄』の序の終りを讀んで聞かすのだった。

「……吾若年ノ時ヨリ鬼利志端宗旨ノ教ヘヲノミ業トシテ竟ニ出家ヲ遂ゲ、長ラク此ノ道ヲ日本

ニ弘メント思フ志深クシテ、數萬里ヲ遠シトセズ、日域——日本のことだ。——ニ至リ、此ノ法ヲ萬民ニ教ヘンガタメ多年ノ間、飢寒勞苦ヲ厭ハズ、山野ニ形ヲ隱シテ不惜身命、法制ヲ怖レズ、此ノ法ヲ弘ム。然リト雖モ日本ノ風俗ヲ見、儒釋ノ理ヲ聞イテ……わが非を覺つた。因つて過つて切支丹となりし者の戒めにこれを書く……」

そう後を端折つて、手渡された所を見ると、天川（支那媽港）のばてれんで、禪宗に改宗した澤野忠庵誌す。寛永十三年九月吉旦、とちゃんとした筆で自署してある。その序文だけ木版のオフセットになっているが、キリシタンの「キ」は「鬼」の字、ばてれんの「ば」は「罰」という漢字を自分であてたりしている。

「何だか哀れですね。」私はいった。「哀れだなんて思うのは、宗教と縁のない凡俗の感じ方かも知れないけど……」

「轉んだことは哀れだ。殊にフエレラはたしか教區管長プロビシヤルという重職にあつたばてれんの大物だから、その彼が拷問の責め苦に堪えかねてころんだばかりか、そんな怪しからぬものを書いたというニュースは、媽港や呂宋ルソンにいた同じ耶蘇會派ジェズイットの者はもちろん、あらゆる耶蘇教徒にとってでんぐり返るような大恐慌だったわけだ。それで天主教の名譽恢復と、信徒の激勵慰撫の決死隊となつて、早速續々長崎へ乗りこんで來ては、飛んで火に入る夏の虫と片端から吊るされたり、殺さ